

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 8 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720010

研究課題名(和文)現代フランクフルト学派研究：アドルノの影響作用史を基軸として

研究課題名(英文)Study of the recent Frankfurt school: Along the influence of Adorno

研究代表者

入谷 秀一 (Nyuya, Shuichi)

大阪大学・文学研究科・研究員

研究者番号：00580656

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：最も大きな研究成果は、2013年に『かたちある生 アドルノと批判理論のバイオ・グラフィー』を出版したことである。これはアドルノの思想がどう生まれ、どう引き継がれていったかという視点から20世紀ドイツ精神史を包括する文献学的分析であり、同時に、生命を巡る現代の議論(バイオポリティクス、バイオエシックス、ライフヒストリーなど)を再活性化する哲学的な試みであったと言える。また研究成果として論文「犠牲者のノについての語り 物語論のための覚え書」が挙げられる。これは現代フランクフルト学派における犠牲者論を紹介するのみならず、この犠牲者というモチーフを哲学的な物語論に組み入れる試みであった。

研究成果の概要(英文)：I published a book in 2013, whose title is Life and form: Bio-graphy of Adorno and the Critical Theory. This is the philological analysis of German intellectual history, and here I paid attention particularly to the point that how was thought of Adorno born and succeeded to the representative of the Frankfurt school. In this book I also analyzed critically the modern arguments over the life (bioethics, biopolitics, biography, life-history and so on). In addition, I want to mention the article "Talking of/about a Victim: Memorandum for the Narrative Theory" as a result of the research. This introduces a victim theory in the modern Frankfurt school and it also performs a trial to incorporate the motif of victim in a philosophical narrative theory.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学/哲学・倫理学

キーワード：アドルノ フランクフルト学派 承認論 犠牲者 物語 苦悩 ナラティブ

## 1. 研究開始当初の背景

申請者はここ数年の間、様々なアプローチからアドルノ、ハーバース、アクセル・ホネットに代表される戦後ドイツのいわゆる「フランクフルト学派」関連の研究を行ってきた。そしてその過程で、戦後から現在にいたるいわゆる「批判理論」の系譜を、そのグローバルな思想的可能性を含めて再検討する機会を得たいと常々考えてきた。

申請者のこの問題意識には、最近のアドルノ研究およびフランクフルト学派の動向の変化が関わっている。ズーアカンプ社のアドルノ全集は彼の死後比較的早い段階で公刊され、内容の大きな変更もなく今日にいたっているが、注目すべきは、最近になりアドルノの講義録の公刊が進んでいることである。こうした動向は、アレックス・デミロヴィッチの研究書 (A. Demirović, *Der nonkonformistische Intellektuelle*, 1999) がその一端を示しているように、大学の公的な教育活動よりも私的な美学研究に没頭したという戦後のアドルノ像に大きな変更をうながすきっかけになりつつある。加えて、従来軽視されがちであった英語圏におけるアドルノ研究にも目を向ける時期が来ている。マーティン・ジェイやロルフ・ヴィガースハウスなどの古典的労作に注目が集まってしまうこれまでと違い、最近ではこうした思想史研究という枠組みを越えて、ロベルト・ケンターやシェリー・ウェーバー・ニコルセンといった若手研究者がアドルノ思想の再活性化を模索している。加えて、しばしば無視されがちなマルクス主義者フレドリック・ジェイムスの先駆的試み (F. Jameson, *The Political Unconscious*, 1981; *Late Marxism*, 1990) を検討する必要もある。が、何といても注目されねばならないのは自ら「アドルノの唯一の後継者」と公言してはばからなかったエドワード・W・サイードの存在である。両者の関係はこれまでほとんど取り上げら

れなかったか、比較されるにしても両者の音楽論に限定されてきた。しかしシオニズムによって国を追われたパレスチナ人であるサイードは、特にアドルノの主著ともいべき『ミニマ・モラリア』(1951)に亡命・追放・故郷喪失というテーマを見いだしており、彼がアドルノに見いだした問題意識、つまり「故郷」という概念の実質を喪失した現代人が自らの生活史についてどのように語りえるのかというオートビオグラフィー(自伝的)問題関心は、経済至上主義のグローバルな動きが個々人の生の在りようを規定しつつある現代においてこそ、引きつがれるべき問題だと言える。

実際、現在のフランクフルト学派においても非常に顕著なのは、こうした「生の物象化」ともいべき問題が身体論、バイオエシックス、バイオポリティクスというコンテクストにそくして議論されるようになってきているという現象である。すでに80年代の早い時期にホネットはフーコーやメルロ・ポンティの身体論を経由しつつアドルノの生概念に接近していたが、こうした動きは同じくフーコー論から出発した、フランクフルト大学社会学部の若手教授であるトーマス・レムケにも顕著である。そもそも2000年前後に、ES細胞の扱いをめぐる生命倫理の問題について論争を展開したハーバース自身が、討議倫理型アプローチでは語りえない伝記的な生活史の問題について、しばしばアドルノを引き合いに出しているのである。

## 2. 研究の目的

以上の思想動向を背景とし、本研究は、現代ドイツのフランクフルト学派の現代的な文脈について、当学派の第三世代を代表するホネットが展開する承認論、生の技法 (Lebenskunst) という観点からマルティン・ゼールやクリストフ・メンケらの行う美学論、そしてレムケなどの新世代が展開するバイ

オポリティクス論といった文脈から広く追跡し、その学際的活動の可能性を検討することを試みる。その際、当該研究が基軸におくのは、やはり第一世代の代表者であるアドルノからの影響である。第二世代のハーバースのコミュニケーション理論には比較的希薄であった生活史 (Lebensgeschichte) というアドルノ的観点がある。現在にどのように引きつがれているかという思想史的連関を視野に入れ、21世紀における当学派のアクチュアリティを見定めたい、と考えたわけである。具体的には、次のような観点から研究を進める。

(1) 思想史的課題 アドルノに関して

従来わが国では、アドルノのテキスト分析は既刊著作に限定された散発的なものに留まる傾向があり、加えて80年代になってハーバースがアドルノの問題設定の古さを指摘して以来、フランクフルト学派の文脈におけるアドルノの位置は不透明なままにとどまってきた。しかし上述のように、その後ホネットがフーコーやメルロ=ポンティを經由しアドルノの思想の身体論的側面に接近していったことは、あまり知られていない。最近のアドルノの遺稿・書簡・講義録の一連の出版事業は、ヘーゲル的な「否定弁証法」という枠組みでのみ語られる向きのあったアドルノ像の変更を求めており、さらに言えば、アメリカにおけるアドルノ受容の系譜 (ジェイ、ジェイムソン、最近ではケンター、ニコルセン、ゲアハルト・リヒター) についても、わが国では活発に議論されているとは言い難い。また、いわゆるフランスのポストモダン運動との関係に関しても、思想史的検討が望まれる。この分野の先駆者であるアルブレヒト・ヴェルマーに加えて、近年ではアレクサンダー・ガルシア・デュットマンやメンケがアドルノとデリダの比較研究を行っている。フランスやアメリカにおける影響作用史を含めた、より巨視的な視点からアドル

ノのテキストの再検討を試みたい。

(2) 思想史的課題 現在のフランクフルト学派に関して

現在のフランクフルト学派の代表者であるホネットの問題関心は、各人の相互承認という社会的契機に基づく倫理的な規範形成をいかにして進めてゆくかという点にあるが、そのさい彼が個人的人格形成における対他関係の経験という心理学的な次元を重要視している点は、あまり注目されておらず、まだまだ検討の余地がある。加えて現在の学派周辺では、ゼールやメンケ、エバーハルト・オートランドなどが生の技法という観点からアドルノ美学の再検討を求めている。こうした美学的関心と社会学的関心との交錯は、生命科学の時代において「よき生」とは何かという問いが切実な問題として浮上しつつあるドイツの現状を物語っている。こうした文脈を丹念に追跡調査したい。

(3) 理論的課題 オートビオグラフィーの問題圏

オートビオグラフィー、すなわち自伝の問題ということで申請者が考えているのは、死生観の揺らぎやバイオテクノロジーの日常生活への浸透 (例: 臓器移植や遺伝子組み換え技術) によって自己の生と他者の生の境界、あるいは生自体における自然さと人為性との境界が不透明化する中で、自らの (オート) 生 (バイオ) について語り、イメージする (グラフィ) ことの意味である。これはカント的な義務論や功利主義的な取捨選択技術に還元不可能な観点である。科学的な治療以上に臨床的なケアの重要性を提唱する近年の社会倫理的議論においてナラティブ (語り) の重要性が注目されてきたように、自伝や伝記といった物語的形式が社会的自己の形成とどう関連しているかという問題は、アイデンティティの不透明さが際立ちつつある現代社会の検討課題だと言える。しかもこれは上述した現在のフランクフルト学派のコンテ

クストともクロス・オーバーする問題であり、何より故郷喪失の状態にある現代人が自らの生について語ることを意味を検討し続けたサイドやアドルノの関心につながる。(1)(2)における実証的・文献学的な思想史研究を基盤に、生におけるナラティブの意味を「オートビオグラフィー」というテーマのもとで展開することも、本研究の事案である。

### 3. 研究の方法

#### (1) 文献学的アプローチ

最近公刊され続けているアドルノの講義録、フランクフルト学派の影響作用史の結晶ともいべき「批判理論年報(Zeitschrift für kritische Theorie)」を詳細に検討するだけでなく、ジュディス・バトラーやジェイムソンなどのアドルノ論を追跡する。また、ホネットおよびその周辺の知識人のテキストを追跡するほか、マーティン・ヴァイス編集の『ピオスとゾーエー』(2009)に典型的に表れているような、ドイツ国内におけるバイオエシックス関連の議論を、社会哲学的観点から検討する。

#### 現地での情報収集、海外での発表

申請者は2004-2005年にフランクフルト大学哲学部に在籍し、ホネットのもとで研鑽を積んだほか、フランクフルト社会研究所に近年設立された「批判理論のための国際研究グループ」に在籍し、様々な国から来た研究者グループと共同プロジェクトを行った。当該研究を進めるにあたり、再び彼らとの連携を深めてゆきたい。すでに申請者は当該グループの一人であるマキシム・ブラネンコ研究員にロシアに招聘されており、2011年5月にウラジオストク極東技術大学で講演を行う予定である。さらに上記の社会研究所では2002年より「Frankfurter Adorno Vorlesung」と題して、年に一度学際的な研究プロジェクトを開催している。学派の現状とアドルノの影

響作用を見定めるために、ぜひこの研究会に参加したい。

#### (2) 国内での発表

さし当り申請者は研究成果の発表の場として、日本哲学会、日本倫理学会、関西倫理学会、社会思想史学会、日本生命倫理学会の他、申請者が所属している「批判的社会理論研究会」(<http://affkt.org/>)、また2010年度より申請者も研究協力者として参加している「最先端ときめきプログラム：バイオサイエンスの時代における人間の未来」(代表者：檜垣立哉、大阪大学人間科学部教授、<http://tokimeki.hus.osaka-u.ac.jp/index.html>)などを考えている。

### 4. 研究成果

#### 2011年度

研究実施計画の通り、申請者はフランクフルト社会研究所の同僚であったブラネンコ氏の招聘により、2011年5月27日にウラジオストク極東技術大学にて、当該大学教授セルゲイ・E・ヤチン教授の主宰するシンポジウム「諸文化の境界における哲学像」に参加し、講演を行った。活発な議論が交わされ、国際連携の強化がはかられたことは大いに有意義であった。なおこの内容は共著『生命と倫理の原理論 バイオサイエンスの時代における人間の未来』(檜垣立哉編、大阪大学出版会)に収録され、2012年3月に公刊された。

また申請者は2011年12月13日に大阪大学にて、当該大学人間科学部教授檜垣立哉氏の主宰する最先端ときめき推進事業(課題名「バイオサイエンスの時代における人間の未来」)において口頭発表を行った(「アドルノとは誰か バイオグラフィーのバイオポリティク」)。これは研究計画全体のテーマでもある生活史、ナラティブ、自伝といった観点からアドルノ・ホルクハイマーの共著『啓蒙の弁証法』を読み解く試みであり、彼らが

西洋の源テキストともいべきホメロスの『オデュッセイア』をどう「脱構築」したか、その方法論と射程について論じたものである。文献学的な基礎研究であったが、同時に研究計画全体の方向を指し示すものとして非常に有意義な発表であった。

さらに申請者は 2012 年 3 月に「批判的社会理論研究会」(大阪大学)にて発表を行ったが(「制度の道徳的基礎づけは可能か ホネット『イデオロギーとしての承認 道徳と権力との連関に寄せて』から承認論の現在を読む」)、これはフランクフルト学派第 3 世代を代表するホネット氏の相互承認論を検討するという 2012 年度の研究計画を先取りするものでもあった。

#### 2012 年度

今年度の所産は、何と言っても 2013 年 3 月に申請者の単著『かたちある生 アドルノと批判理論のピオ・グラフィー』が上梓されたことである。これは 400 頁を超える大著で、アドルノの思想の歴史的な生成過程から、それを引き継いだ現代フランクフルト学派の思想動向に至るまで、つまりフランクフルト学派を主軸に 20 世紀ドイツ精神史を包括する試みであり、同時に、現在のフランクフルト学派の思想動向を整理し、申請者独自の「哲学的自伝論」という観点から、そのアクチュアリティを析出する試みであった。特に、他者に巻き込まれつつ自己を語るよう強制される主体 というモチーフは、自伝というテーマを単なる文学論から解放し、社会的な評価制度の問題にまで拡大しうる理論的ポテンシャルを有しており、「社会を生き延びる」という問題をラディカルに反省する上で有用な新機軸をもたらすものだと言える。

#### 2013 年度

2013 年度は、研究実施計画の通り、7 月にフランクフルト社会研究所が主催した A・コショーケ教授の連続講演「物語る者としての

ヘーゲル ヨーロッパ近代のナラティブな体制」に参加し、フランクフルト学派内部でも物語論がアクチュアリティを帯びつつあることを確認できた。さらに 2014 年度には、大阪大学未来戦略機構の学術雑誌『未来共生学』第一号に論文「犠牲者のノについての語り 物語論のための覚え書」が掲載された。これは O・リンデマンや K・ギュンターといった現在のフランクフルト学派の若手研究者の研究を紹介するとともに、両者が扱っている犠牲者というモチーフを、苦悩を共有するとはどういうことかという物語論の地平で改めて問題化する試みであり、申請者の自伝論をさらに推し進める有意義な契機となった。

#### 今後の展望

今後の展望としては、物語論やフランクフルト学派に関係があるものの、本研究では詳細に展開できなかったテーマについて論じてゆく、という課題が挙げられる。具体的には、生殖技術や福祉システムなど、われわれの社会的生存と直結するテクノロジーの問題であり、もう一つは、現代人の心の問題である。また、フランクフルト学派の思想動向にこれからも注視すると同時に、社会哲学的視点から物語論を展開している内外の研究に焦点を当てることも今後の課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

- (1) 入谷秀一 「犠牲者のノについての語り 物語論のための覚え書」、『未来共生学』第 1 号、大阪大学未来戦略機構編、3-24 頁、2014 年、査読有
- (2) Shuichi Nyuya "What compels you to tell about yourself? Autobiography, biography, and biopolitics ",

Philosophia OSAKA No.8, Osaka University,  
pp. 63-75, 2013, 査読有

(3) 入谷秀一「全体性の幻想 アドルノの  
ワーグナー論再考」、『コンフリクトの人文  
学』第4号、大阪大学グローバルCOEプログ  
ラム・コンフリクトの人文国際研究教育拠  
点編、大阪大学出版会、125-153頁、2012年、  
査読有

〔学会発表〕(計 6件)

(1)、入谷秀一「アドルノとフロイト  
昇華されざるものの位置を巡って」、芸術批  
評塾第三十三回例会口頭発表、神戸大学、  
2013年10月25日

(2)、入谷秀一「震える理性 アドルノ  
はカントから何を学んだか」、芸術批評塾第  
三十二回例会口頭発表、神戸大学、2013年9  
月24日

(3)、入谷秀一「制度の道徳的基礎づけは  
可能か ホネット『イデオロギーとしての  
承認 道徳と権力との連関に寄せて』から  
承認論の現在を読む」、批判的社会理論研究  
会 第二十一回研究例会口頭発表、大阪大学、  
2012年3月18日

(4)、入谷秀一「アドルノとは誰か ビオ  
グラフィーのバイオポリティーク」、最先端と  
きめき推進事業「バイオサイエンスの時代  
における人間の未来」口頭発表、大阪大学、2011  
年12月13日

(5)、Shuichi Nyuya「日本の哲学と哲学教育  
について」("About philosophy and education  
of philosophy in Japan")、シンポジウム「諸  
文化の境界における哲学像」依頼講演、ウラ  
ジオストック極東技術大学、ロシア、2011年5  
月28日

(6) Shuichi Nyuya「何が『君自身について  
物語れ』と命じるのか 自伝、伝記、そして  
生政治」("What compels you to tell about  
yourself? Autobiography, biography, and  
biopolitics"), シンポジウム「諸文化の

境界における哲学像」依頼講演、ウラジオス  
トク極東技術大学、ロシア、2011年5月27  
日

〔図書〕(計 2件)

(1) 入谷秀一『かたちある生 アドルノと批  
判理論のバイオ・グラフィー』、大阪大学出版  
会、2013年3月、412頁

(2) 『生命と倫理の原理論 バイオサイエ  
ンスの時代における人間の未来』、檜垣  
立哉編(檜垣立哉、加藤尚武、中村桂子、米  
本昌平、金森修、権藤恭之、重田謙、入谷秀  
一、平田雅之、丸田健 著)、大阪大学出版  
会、2012年3月、223頁

担当： - 3「何が『君自身について物語れ』  
と命じるのか 自伝、伝記、そして生政治  
』、165~181頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

入谷 秀一 (NYUYA SHUICHI)

大阪大学・大学院文学研究科・招聘研究員

研究者番号：00580656

### (2) 研究分担者

なし( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし( )

研究者番号：